広報市民リポーターだより
第６回

学校週五日制――休日の過ごし方

リポーター　瓜田輝子（獅子ケ森）

明治維新以後の学制発布以来、先進国に追いつけ追い越せで歩んできた日本ですが、今年から学校は、これまでの週六日制から五日制への切り替えが始まりました。〝ゆとり〟の無さがいわれる今日、五日制によって増える休日をどう過ごすべきなのかを考え、地域のサークルで指導にあたっている畠山充一さんと家庭を考える会会長の福岡潔さんにお話を伺いました。

地域のサークルが校外活動を支援

今年、県教育委員会は、五日制に備え、小中学生の校外活動、地域での活動を活発にさせようと「地域少年少女サークル活動事業」をスタートさせ、市内では下川沿の下川沿地区郷土芸能保存サークルと、釈迦内の自然観察サークルの二つがモデルサークルに指定されています。

これまでの経過はどうなのかを「自然観察サークル」の畠山さんに伺いました。「このサークルは、大山（標高三七五・七㍍）と芝谷地の植物観察を中心に活動しています。大山には少なくても八百から千種類の植物が生育していて、亜高山帯であるものの、千㍍級の山に咲く花も二、三見られますから、観察の場としてはもってこいです。ここでの活動は、観察力や観賞力を高めるのに効果的だと思いますが、子供たちは集中力を持続できませんから、観察対象は少なくして、確実に理解できるようにしています。また、季節ごとの自然のメカニズムを知ってもらい、今度来る時はどういう環境に変わっているかなど、子供たち自身が進んで考えられるようにしたいと思ってます」ということでした。

▶畠山さん（左）のお宅で

十月に、畠山さんに誘われてサークル指導者研究会に参加させてもらいました。その際の講演では、乳児期から学童期が子供たちの体と心の発達の一つの山場であること、学校の教師、友人などは、互いに影響しあって成長していくこと、地域の行事や集団活動に参加することで生活上のルール、マナー、公共心や道徳心が身につくことなどを聴くことができました。指導者の皆さんも学んでおられます。

子供を育てる基本は家庭

さて、五日制と家庭のあり方はどうなのでしょう。福岡会長は、休日への対応は基本的には家庭ですべきで、今回の五日制は子育てを反省するよい機会になるだろうと話します。また、「子供がいて本当の意味で〝家庭〟が成り立つと思いますし、家庭は子供の人間形成の基本となる場所。成長過程に合わせた教育、しつけが大切になります。やりたいことを自分で計画して実行していけるよう、親は応援しながら自立心を育ててあげるべきで、時には危ないと思うこともやらせてみることが必要です。親離れ、子離れがいわれているように、親と子双方が自立することが大事だと思います。学校では休日の行事等の情報を提供する、地域においては、昔、〝啓発経験〟といっていろいろ教え、伝えたようなことをまたやってみる、そうした活動を行政がしっかり支援していくことも考えていくべきでしょう。子供たちが何かやりたいと思ったことに対応できる体制づくりはしていくべきです」とも述べられました。

右が福岡さんです

ゆとりの中で自立心を培って

『人間を思い出そう。出会いは人生を変えることがある。頭で考えるより、感じることの方が大である』と言ったのは、確か宮沢賢治だったと思います。新しい学習指導要領は、自ら判断し、生きていく力としての「新しい学力」を身につけてもらおうという考えが背景にあります。

五日制の問題は、学校はもちろん、家庭、地域社会、行政などが一つになって取り組むべきでしょう。家庭でサタデープランを作るとか、今以上に生涯学習を推し進めるとか、対応策はいろいろ考えられます。

子供の一日は大人の何日分にもあたると思います。スキンシップを図り、子供の目線で対話し、お互いに教え、教えられているという気持ちを持つことが大切です。

鉄は熱いうちに打てといいますが、子供たちを育てるというのは、まさに二度打ちのきかない真剣勝負。一人ひとりの長所や生きがいを引き出してあげることが大切だと思います。

◇広報市民リポーターだよりは、毎月１日号で、６人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。